

## 国語

以下で引用している問題は、すべて2023年度前期入試の問題です。

著作権の関係で国語の入試問題原本は掲載できませんので、可能ならば書店や塾で入手してください。

来校いただければ、本校の『入学試験問題集（2021年度～2023年度）』を差し上げます。

例年の入試説明会で、国語科からお話しているのは以下のことです。

- 読解と表現との二本柱を立て、長文をじっくり読み通すこと、自らの考えを記述して答えることを重視しています。
- 小説の主人公の人物像や行動を読み取ることは、読者である私たちの生き方や経験にかかわっています。日頃から小説など数多くの文章を読む中で、人の心の動きや考え方について学ぶようにしてください。
- 漢字の書き取り問題： 残念ながら、字体が乱れ、読めない漢字を書く人がいます。とめ・はね・はらい・文字の形をきちんと意識して、ていねいに書く練習をおこなってください。いかげんな文字には点数を与えません。
- 選択肢問題： 内容読解の問題では、傍線部周辺の数行程度しか見ないで答えている人が多いようです。全文をしっかりと読み通すことが、どの問題を解く上でも基本になります。
- 記述問題： 読むことに十分な時間をかけて、ていねいに考えて書いてください。とくに解答欄が大きい問題は、読み取って考えたことを、自分の言葉で存分に書いてほしいと思います。傍線部の前後の引用だけですませたり、自分勝手な思い込みでストーリーを作ったりしてはいけません。記述問題の配点は、全体の半分以上を超えることもあります。自分の言葉で書いて表すことをよく練習してください。それには、文章を自分の頭と心でしっかり読み通すことが絶対必要なのです。

では具体的に、2023年度の前期入試問題で上記の注意点を説明したいと思います。

2023年度の前期入試では、梶井基次郎（かじい もとじろう）の『夕風橋の狸（ゆうなぎばしのためき）』という小説を出題しました。1924年（大正13年）に発表された古い作品です。国語科としては、現在活躍する作家の作品だけではなく、文学史に残る作家の作品もぜひ読んでもらいたいと考えております。古今を問わない幅広い読書経験を積むことで、優れた文章に多く触れ、豊かな感性を育んでもらいたいという国語科からのメッセージです。また、古い文章の文体にも、ある程度は慣れておいてほしいと思います。

設問については、本文の内容を正しく読み取る力を問うものだけではなく、問十三のように、本文を理解した上で、提示された会話文の誘導に従って答えるべき内容を類推し、それらを整理して説明する問題もありました。本文を部分、部分だけで読み解いて、感覚的に問題を解こ

うとしても、望ましい結果は決して得られません。全体を通して登場人物のどのような姿を描き出そうとしたのか、主題をとらえたうえで、それぞれの設問にあたってほしいと思います。

ここでは、先に述べた問十三を例に挙げて、説明したいと思います。

『夕風橋の狸』という作品の冒頭部分には、以下のような一文がありました。それは問十三の設問文に書かれている「私という恥の多い者にもこのような憶い出がある」というものです。この解釈をめぐって、二人の男の子が語り合っています。まずはその要点を整理しましょう。

①「恥の多い者にも」の「にも」は何かプラスになるものが続くような表現である。

②その他に、「にも」は強調する表現にも使われていて、「恥の多い人生だったけど……やっぱりあれが一番恥だなあ」という意味にもなる。

この設問の場合、洛太郎と星雄の話し合いの結論として導かれたのは②の意見です。これにのっとりながら解答を考えなければいけません。これが先に述べた「誘導」というものです。

さて、設問では「『私』はこの話のどのような点が人として最も恥だと考えたのでしょうか」とあります。それを整理して「自分の考えを述べ」なければなりません。ここで注意したいのが「人として」という表現です。「人として」はやってはいけないことをやってしまったことが恥ずかしいのです。単に「四郎をおどそうとしたのにやり返されてしまった」という、二人の兄弟のケンカの説明に終わった答えは得点できなかつたと言えます。

では「人として」やってはいけないこととは何でしょう。

傍線部⑨の後ろに「その威しをその後憶い出すたびごとに私はいつも自分ながら恐怖に打たれるのが常である」とあります。おそらく四郎を追いつめてしまったことへの「恐怖」であり、弟をそこまで追い詰めた自分を恥じ入ることが、冒頭の一文「私という恥の多い者にもこのような憶い出がある」につながっていると考えられます。よって、この最後の威しの場面こそが「人として」やってはいけないことなのであり、ここから考え始めることにします。

なぜ「私」は四郎を驚かせようとしたのでしょうか。それは、傍線部⑨の直後に「一つにはそれは三郎に与えられた不公平などと思われる叱責などに対するバランスとしてであった」とあるように、直接的には三郎だけがしかられて、一方の四郎は特にしかられたわけでもないことへの理不尽な怒りからでした。ただ、その「一つ」以外にも、遠出を禁じた父母に対する怒りであったり、父母に反して遠出をしてしまった三郎への同情であったり、または食事を我慢して探すように言われたことへの父母への怒りであったりと、やりきれない怒りが「私」を覆っていました。その怒りが「四郎」に向けられたわけです。

「四郎」はまだ七つであり幼い子供です。狸のまねをして威しただけで慌ててしまったり、

おびえてしまったりするくらいの子供です。そんな幼い弟に向けて、夕風橋の狸のまねをしておびえさせ、彼を追いこんでいることは、長男として大人げのない行動です。しかも、それは四郎が「私」をたたいたり顔を傷つけたりと本気で抵抗<sup>ていこう</sup>していることから、彼の心をととも傷つけているわけです。これは、はたして長男として許される行動でしょうか。

以上をまとめると以下ようになります。

- ①三郎だけがしかれることへの理不尽な怒りから四郎を威そうと思った。
- ②まだ7つの幼い弟に向けて夕風橋の狸のまねをして驚かせた。
- ③それは長男として大人げのない行動であった。

これらを「人として」……という点が～だから「人生の中で最も恥だと考えた」とつながるように整理していきます。すると以下のように導けるでしょう。

- ①自分のやり場のない感情をぶつけた。
  - ②物事の分別もつかないような幼い弟を傷つけた。
  - ③それは大人げのない行いであった。
- これらをまとめればよいわけです。

実際の受験者の解答では、「人として」という視点を入れずに、「私」の行動だけを説明する答案が多くみられました。また誘導のための会話文を読まずに答案を作成したものも見られました。先にも述べたように、会話文から導いた結論にしたがって、本文を読み取っていくという考え方が大切です。複数の文章がある場合、それらをつないだり、推測<sup>すいそく</sup>したりするのは大変かもしれません。しかし、こういった問題は読解だけではなく、類推する思考力も大切です。自分の読み方をいったんリセットして、誘導に示された考え方や視点を取り入れて考え直すということも、心がけてください。

その他の問題でも、解答の形式に注意できていない答案が見られました。

気持ちを問う設問であるにもかかわらず、「〇〇という気持ち。」と答えられていない答案も一定数見られました。実際に問題を解く練習をするときには、「何が問われ」「どのように答えなければならないか」を常に意識しながら取り組むようにしてください。

最後に。

今の自分にはない考え方や価値観、文体に出会えるのが、小説を読む醍醐味<sup>だいごみ</sup>です。そうした「読書経験の差」は、試験の場で目にする作品に対応する力として現れてきます。ぜひ多くの作品に触れて下さい。